
異世界トリップにおける10人の俺の立ち振る舞い

ドミノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界トリップにおける10人の俺の立ち振る舞い

【著者名】

ドリノ

【ノード】

N5284N

【あらすじ】

目が覚めていたら白い空間に拉致されていた俺。しかしそこには自分を含めて合計10人の『俺』がいた。その空間からの脱出方法は『1人になること』似非デスゲームから始まつた俺の異世界トリップの話。

この作品はArcadiaでも投稿しています。

第一話 自分ほど信用出来ない人間はこの世にいない（前書き）

もう一作は熟成させます。
ちょっとこの作品を通して読みやすい文を書く練習。
読みにくいとか誤字脱字の指摘とか感想はあるだけ嬉しいです。

第一話 自分ほど信用出来ない人間はこの世にいない

「おー、起きる、お前が最後だぞ」

どこか聞き覚えがあるような無いような。そんな声にまどろんでいた意識が揺さぶられる。
少しまぶたを上げてみれば眩しい光が突き刺さってくる。
眩しい……？

「やべつー、遅刻……！」

息を飲みながらガバリと体を上げて動き出す。起きた瞬間に光量から時間を推定するのは慣れている。田覚ましのスヌーズを寝ぼけながらも切つてまた布団に潜り始めてしまう自分の数少ない特技。あと5分いけるかどうか見極めるために生まれた特技だが。明かりの量ではもう諦めたほうがいい時間帯だったが周りを見て状況を判断する。

白と立つてゐる数人。

……？ 自分の部屋ではない？ 真つ白い空間の中で田を覚ました、らしい。

前日普通に部屋で寝た記憶がある。それなのに自分の部屋ではない？ 脱ぎ散らかした服も積み重ねた中古の漫画もゲームのパッケージもない。

ただの白い空間。
拉致？

「よつ」

混乱していくといふといふいたさかと同じ声がかかる。少なくともある

程度友好的であり理不尽を強いてくる様子はない。

すこし怖くなりながらも今は情報収集が最優先だ。返事をしながら声の方を向くと。

「お、おひ。って俺?」

「うん。『俺』だ」

9人の俺が立っていた。

第一話 自分ほど信用出来ない人間はこの世にいない

白い空間の中。合計10人の俺はイスに座りながら会議をするよう円形を組んでいた。イスは俺、（おれだしう）が【イスとか無いかなー】と言つたら空中から人数分降ってきた。材質は分からぬ真つ白いイスだ。手品か魔法っぽい。ファンタジーか超科学かはまだわからない。

「確認そのいち。『俺は佐々木九曜』26歳。インド天文学やインド占星術が扱う9つの天体とそれらを神格化した神で繁栄や収穫、健康に大きな影響を与える意味から名付けられた。

結婚して苗字変わったとか名前えたとか歳違うとかは?」

『ない』「ないのかー」「頑張れよ平行世界の俺」「とはいっても所詮は俺」「逆にいたら名前聞き出してはじまるストーカー生活?」「居なくてよかつたな」「よくねえよ」「彼女は欲しかった……」「切実だよなー」「ほんとによー」

「確認そのに。勘だけど極めて近いニアリーイコールで結んでもいい『俺』達が集められた。家族が死んだとか変化ある奴は拳手」

『…………』「これもいののかー」「勘だけどな」「住所とか会社変わつてなかつたし」「世界線はどじよー?」「境界線上」「…………もうあの厚さは田にすることはできないのか……」「力レーを食べれば問題ないですねー……」「落ち込みながら付き合つのかよ、積みゲーが……」「まだ英雄編の途中装甲悪鬼村正……」

「…………確認そのさん。拉致されてここにいる。なんか儀式したとか数日前に怪しげな古い師とも接觸をした覚えはない。気がついたらここにいた。決して自由意志で来たわけではない」

『うん』「映画のキューブみてえ」「一作目はまだトラウマ……」「開幕サイコロ……」「いちいち色が変わるのがあんなにもストレスになるとは思わんかった」「もうちょい普通の異世界召喚されたかった……」「なんだよ召喚されて最初にやるのが『自分』との余議つて」「くそ、俺を召喚した可愛い巫女さんとフラグ立てたかつた」「鏡見ろよ不細工」「自己紹介」

俺はイケメンではない。普通の顔立ちだ。厳しめに評価してもの中。なんかほめられてせいぜいが『優しそうな顔立ち』とかそのレベルで終わる程度だ。

問いかけた『俺』が黙つてこちらを見てくる。次は俺か。確認は

一人づつ順番に行なつてゐる。状況を整理するために何かしら問い合わせをしなければならない。

別に自分と好き好んで話してゐるわけではない。ただちょっとあり得ない事態に遭遇しているから記念みたいなものだ。

「えーと。んー。体に変な刺青されてるとか首の後に番号書いてあるとかはない。

外見上は変化なし。持ち込んだものは着ていたパジャマ上下だけ。他にはなし」

『うん』「この状況の意図ねえ……」「複数勇者召喚モノ読みすぎた?」「しかしそれにしたつて平行世界の俺を10人同時に召喚できるほどのエネルギーと技術?」「これは実行犯の本心聞かないと無理じゃね?」「それもそうだな」「俺の声つてずっと聞いてるとストレスになる」「それはどうしようもない」「はやく議論終わらせようぜ」「まあ、次に何するかはもう決まってるんだけど、嫌だなあ……」

喋り終えて9人の俺の反応が返つてくる。そのどれもがうなづける本心からの『俺』の思考だった。

誰も嘘をつく必要性などない状況だ。すぐにバレるだけなんだが。次の俺にパスをする。超嫌そうに顔を歪める俺。そんなものは見たくない。こちらもしかめつ面になりながらも顎を動かして“やれ”と合図する。

気持ちは分かるつて。

「はあ……。あーくそ。思いつかねえから多分最後だ。

この状況はデスゲームであり、最後の一人にならないと脱出できない

全くもってため息しか出でこない状況だ。

「イスと同時に降つてきた一枚の紙」 「内容は一人に付き一回の“魔法”行使回数があるという説明と」 「同時にこの密室空間からの脱出法が書いてあつた」 「内容はこの空間で1人になれば出口が現れるとのこと」 「あちらの意図はおそらく“魔法”を使っての殺し合い」 「しかし俺は日本人」 「いきなり殺し合いと言われても……」 「まずは話し合いから始めましょう」 「自殺いくない」

俺が順々に口を開いていき情報を整理する。頭の中の思考を断片的ながらも違う場所から声として出される。実はちょっとだけ面白い。

しかしそれでも頭の中は動き続ける。全員が全員殺し合いをするか話し合いをするか天秤にかけてる最中だらう。もし殺しあうしか道がなければすぐに動き出すはずだ。まあそれでもじゃんけんで決めるとかその程度だらう。進んで自分を殺してみたいという欲求なんて持つてない。

そんな状況の中でもまだ話し合いを続けるのはひとえに俺が無意

味な行動を嫌つていいからにすぎない。まず情報も足りないし、この状況を創り上げた“主催者”的意図がわからないからだ。殺しあう様を見たいのか脱出するために足搔く様を見たいのか。それすらまだわからない。

「さて、最初は認識法からだ。全員俺だが密室の中で同じ場所に立てないというだけで“差”が生まれてくる。これからの状況にもよるだろう。

まずは俺を呼び分ける名前から。アルファベットは成績を思い出すから却下。数字も序列みたいだし却下。アルファから始まる呼び方も却下。」まで覚えてない。

んー。ファースト、ワン、イチ、ハジメ、アン、アイン、アジー、ウノ、イー、モジヤでいこう。

言いだしっぺの特権。アインで

「くそ、取られた。ハジメ」「ウノ」「イーで」「ファースト」「イチ」「アジーン」「……アン」「……ワン」「……モジヤ」「……ハア」

俺はウノと決まった。正直言えば軍隊みたいにアルファ01ーだとかも良かつたけどメンンドイので各国の“1”を呼び名とした。

『一応全員同じ“一人”だけど差別化はちゃんとしますよ』という意味あいからつけた。モジヤはスワヒリ語だ。一人だけハズレ感が半端ない。

今も落ち込んでるモジヤ。その瞬間にちょっとだけ自分に優しくなつてしまつたのだろう。かわいそうに……。手を上げて発言し始める『俺』がいた。

「イチ発言。司会はAINがいい。いちいち判別しないといけないのは頭が疲れる。

あと、イスは俺だからもう俺は魔法使えん。」

「ワン発言。どうやって魔法発動させた?」

「イチ発言。欲しいなあつて思つたら『OK?』つて浮かんできたから『うん』つて。

思考の中だけでやり取りして試してみたけど発動条件は本氣で願う。承認する。の2工程。

多分最初の魔法に反応して紙が出てくるシステムにしたんだろうから一発目、俺の魔法は相当ハードル低くしてたっぽい。

感触としてはこんなもんだった。」

イチの体験談ではこんな感じだつた。顔や位置で判断するのも辛いから自己申告で自分の名前 + 発言で喋り始めることにしたんだろう。俺しか居ない会話は存外スマーズだ。

「アジーン発言。しかし残りあと9回……。魔法はシステムか。すでに設定されてあってこっちからいじれないタイプ。だけどこれ人によつてはすぐ全滅か素手の殺し合いのどつちかに偏りやすいんじやね?」

どうせ億万長者になりたいとかそれを元の世界に帰還せらうとかは無理だらうし。

まずここで1人にするための“潤滑油”程度しかできないんだろう

うな

「イー発言。さてそうすると見えないだけで時限付きなのかもな。この部屋。

ランダムで人が死んでつたり、武器が落ちてきたり、水で満たされて窒息死とか。

魔法で【10人分の長期生存に必要なもの全部】とか望んでも叶

えられるか駄目かどうかは分からぬ。そのくせ一人魔法を使えば
そいつはこのゲームからドロップアウト。その願いの中にナイフや
殺傷力のあるモノがあつてもおそらく魔法には勝てない。

逃げ回りながら『自分以外死ね』と願えばいいだけだらうし。
魔法を使っても手に入るのはその願いとちょっと周りの自分より
献身的という優越感ぐらいか？

イチ死んだな

「イチ発言。うつせ。割りとどうでもいい。死ぬ時になつたら後悔
するけど」

なかなか現実を見据えた発言をするイー。対して死刑宣告をされたイチは軽口を叩いてる。

まだこのデスマッチに乗り気ではないからこそその発言なのだろう。
自分をしっかりと理解しているからの余裕か。それとも自分にな
ら殺されてもいいと諦めているのか。
なんか喉が乾いてきた。発言する。

「ウノ発言。魔法使つてもいい？ 喉乾いてさ」

「アイン発言。賛成の人挙手」

9人全員が手を上げてくれた。自分が何を考えているのか分かる
のだろう。

軽くうなずいてわかりやすいように言葉にして魔法を使つと願う。

「ウノ発言。『飲み物、軽食を含む会議セット10人前が欲しい』」

頭の中に違和感。語りかけられたような感じもあるし、目を閉
じた時にそれが浮かんでくるような感じもある。

『OK?』と。

文字と音と脳内で一いつらの意志を確認していく何か。それに『ハイ』としっかりと返事をする。少しの虚脱感と喪失感と引換えに何かが生まれる気配がする。

瞬きをした瞬間。

直径4メートルほどの白い丸テーブルが俺たちの真ん中に出現していた。そのテーブルの上にはジュースやらお菓子やらが置いてある。

個人個人の目の前にはクラブハウスサンド、筆記用具、B5サイズの真っ白い紙が存在していた。紙は5ミリ位の厚さがあり、少なくとも紙不足にはならなくて済みそうだ。

ジュースやらお菓子やらの包装は剥がされており全て真っ白になっている。ペットボトルの形からも情報は得られない。

それでも目覚めてから何も口にしていない状態には耐えられなかつた。

9人の俺以外の俺はテーブルの上を眺めてから同時に口を開いた。

『ナイス』

全員揃つて褒めてくれた。

さて、どうしようか。考えながら最後のサンドを口に入れて咀嚼する。

イーによれば俺はドロップアウト組らしいし。イチとは仲間になれたが。別に平行世界の俺と同じ選択をしましたよ！ やつたね！ という気分にはなれない。

クラブハウスサンドを食べ終えて、今は人数分あつたポテチらしき袋を破つてポテチらしき物体を口に入れている最中だ。

クラブハウスサンドは美味くも不味くもなかつた。普通の味だ。オレンジジュースを飲みながら考える。これ100%じゃねえ。超科学説濃厚か？ それとも幻覚？

「アイン発言。ナイスウノ。パジャマ会議の中の唯一の清涼剤だわ」

「ウノ発言。外見だと見分けつかねえじゃん。嘘つきめ」

「アイン発言。いや司会になつてからのぞ乾き始めてやー。ありがたいホント」

そう言つて「ぐぐく」とジュースを飲むアイン。他の皆もクラブハウスサンドを食べ終えて大体がジュースを飲んでる。

これまた人數分揃えられていた濡れ布巾で手を拭いて筆記用具を手に取る。白いボールペンだ。それを使い紙にメモを取る。スラスラと抵抗なく軌跡が文字となつて紙に浮かぶ。機会があれば持ち帰りたいほどの品質だ。

- ・魔法は一人一回
- ・最大規模、出力、限界などは不明。
- ・ファンタジー、幻覚、超科学が今のところ候補。

- ・1人になるまでは脱出できないとのルールがあるらしい。
- ・魔法は殺し合いを進めるための道具。おそらく実行犯側に不利なことはできない可能性あり。
- ・魔法使用組：イチ、ウノ（俺）
- ・イスと会議セットは魔法産。全部白。情報は得られず。

この程度しか書くことがない。魔法をつかって情報を集めたいが他の俺に対する強制力など持ち合わせていない。脅すとしてもジュースぶつかけておねしょみたいにしてやる！ くらいしか浮かばん。ボールペンは持ち帰りたいし。

ぐるぐるとペンを回しながら考える。全員が俺なら口を開かなくても勝手に会議は進むだろう。寝てサボりたいが他の俺達もあくびをしながら周りを牽制している。どつかの野生動物かお前らは。少し真面目な声を出してアインが切り出す。

「アイン発言。朝飯も食い終わったし、残り8回の魔法で全員生き残れる方法を考えますか」

本題がはじまつた。

「ハジメ発言。まずは魔法について知りたい。何ができるできないをきちんと知らないと解決策は見えないとと思う」

「ファースト発言。イーの言つていたこの部屋に対する仕掛けも魔法で聞いたほうがいいだろ?」

「アン発言。具体策がきまつたらそれが可能かどうか判断する魔法も必要じゃね?」

「ワン発言。これで“解決策”含めて4つは最低必要。残り4つはフリー。まあまづは魔法とこの部屋だな。俺が魔法について聞くわ。内容は『魔法についての定義とできる』ことできないこと、具体的に使われた例を日本語でB5、100ページ以内にまとめた紙が10セット欲しい』で」

「アイン発言。今のでいいと思つ人は挙手。そうじゃない人は意見を言つてくれ」

少し考える。すぐに挙手をできる案件ではない。

……特に穴は無いはずだ。説明が欲しいと言つても一回音声が流れてきて終了ということもあり得るし、日本語でない場合それを翻訳するのにも魔法を消費してしまう。

この密室を埋めてしまつほどどの紙が降つてくるとこつ事態にはならないはずだ。

一度魔法を使つた身としては日本語でも英語でも通じる気配はあつた。あれはわかりやすく『OK?』と言つていたのであって、あちらは別に日本語で『本当によろしいのですか?』といつてもいいのだろう。ただの意志確認だ。こちらが魔法を使えば日本語に変え

てくれるかも知れないがそれではただの無駄使い。希望的観測とかいいようが無いがそれでもなにか超常的で人間では理解のできない力の働きがあつたように感じる。

手を上げて賛成という事を示す。あと上げてない奴は居ない。ほとんど同時に手を上げていたようだ。

「ワン発言。じゃ、やるぜ。『魔法についての定義とできることできないこと、具体的に使われた例を日本語でB5、100ページ以内にまとめた紙が10セット欲しい』」

瞬きをすると。

眼の前にメモと同じサイズの紙で作られた冊子が置いてあった。タイトルは『魔法概要』。そのまんまだ。手にとつてページをめくる。大体感触で言えれば30枚程度の冊子だ。

魔法概要

魔法とは魔力をエネルギーとして用いて世界に現象をおこすことを指す。

観測者の観測したものも魔力で再現して世界に現出をすることが多い。

明確なヴィジョンがあれば最終的に個人の空想や願望をそのまま具現化させることも可能。

・できること

ほとんどの人間は使用者の観測したもの、現象、存在するものでなければ操つたり再現したり呼び寄せる事はできない。

・できること

魔力を用意して目的のモノを観測していれば理論上はできないことはない。

最高級の実力と想像力があれば想像を現実に持つてくるという荒業で観測していないものを現実に持ち込める。しかしこれは理論上の話でありほとんど不可能に近い。

開いてから大体の説明がこれだ。あとは具体例で埋まっている。その具体例が“あ”から始まる人間の名前が書いてあって大抵それの後ろに殺害と書かれてあるのはうんざりさせられる。

日本人名⁺の殺害で約30枚の紙が埋まっている。おそらくこの空間で行われた殺害の履歴だろう。システムが判断したのか“理論上できないことはない”と書いてあるからもう情報を開示したくないのだろうか。随分とおざなりだ。魔法についての情報はあやふやだ。できるできないの壁も明確な条件も触媒についても書いてない。Wikiに書いてある情報をさらに薄めたような感触。あまり気分はよくならなかつた。

「イチ発言。おかしい部分がある。俺はこんな不思議な材質のイスなんか見たこと無い。

俺がないってことはお前らも無いはずだ。しかも魔力？ じゃあなんで俺らは回数制に変わつてんだ？」

「ウノ発言。この部屋にトリック説が濃くなってきたな。俺の使える魔法とこの紙に書いてある魔法は同じはずだ。じゃなきゃ日本人名が出てくるのはおかしい。

後半はこここの殺害履歴だろうしな。でも日本人がこんなに誘拐されたとは思えない。

1ページに約30行として×60で1800名だ。大体1900

年から開始して110年から140年くらいだと年間……約170人って、ありそ「うわー神隠しでもあり得てきたのかよ嫌つすなあ」

「ワン発言。うわー神隠しでもあり得てきたのかよ嫌つすなあ」

頭を抱えながらメモを取る。

- ・魔法は魔力があれば大抵できることはないタイプ。
- ・人間の持つてる魔力が少ない説か、異世界人保有魔力最強伝説のどちらか？
- ・ここでは約1800名×10セットの殺し合いが開催されていた。
- ・いなくなつたことがあつちに伝われば年間170~20人の行方不明者がここに来てた計算。
- ・魔法使用組：イチ、ウノ（俺）、ワン

魔法についてと同時に書き込む。スラスラと書けるのだけが心地よい。どんよりと落ち込んできた俺の心を癒してくれるのはありがたい。

そして断言する。こんなボールペン見たことも持つたこともない。さつきの魔法概要に沿つて言い換えれば観測したことがない。つまりこれは俺の魔法と魔力によつて作られた理想のボールペン。

会議セツトも理想のなに……クラブハウスサンドあんま美味しくなかつた。やっぱりこの空間になんか仕掛けられてるのはほぼ断言できる。殺し合いをさせたいから衣食住は再現しても不満が出やすいやうにしてるに違ひない。

「モジヤ発言。皆思つてるだろうけど」の空間について次は確かめたほうがいいと思う。魔法は俺が使う。『この空間と俺らにかけられた制限を日本語でB5のプリント100枚以内に10セット欲しい』で

今回は“制限”を書きだせつて言つてるから大丈夫だと思つ。これ以上はあるかな?』

「イー発言。状態、制限、魔法、条件に変えたほうがいいんじゃないか?』

「……モジヤ発言。行けるかな? 魔法についての冊子からすると大丈夫っぽいけど

「アイン発言。賛成の人挙手」

全員が手を上げた。これは必ず確認しなければならないだろう。約1800名の殺し合い、『自殺』が行われた場所だ。何があるか分からぬ。

「モジヤ発言。『』の空間と俺らの状態、それとかけられた制限、魔法、条件を日本語でB5のプリント100枚以内に10セット欲しい』』

瞬きをすると一枚のプリントが現れていた。

白い空間

- ・ここは一辺が50メートルの立方体である。
- ・その白さは人の精神を追い込む効果がある。

- ・ここは意識体を閉じ込める空間である。
- ・中に存在するものは実体を持つていない。
- ・【魔法】【そこは意識体の願いをひとつ叶える場所である】
- ・【蠱毒の壺】は正常に稼働している。
- ・意識体が一人になつたら【出口】が現れる。
- ・時間制限は残り99時間と18分。

佐々木九曜

- ・意識体なので魔法を使うことはできない。
- ・【蠱毒の生贊】
- ・10人全員が本物であり「コピー」もある。
- ・用意された体はひとつだけ。
- ・元の世界では死んでいる。

『え』

そうとしか言えない。思わず最初から一度見してしまった。

俺は死んでいる？ しかもコピー？

襲ってきたのは脱力感。全身から力が抜けてイスの背もたれに深く体を預ける。軋みを上げているのにこれが嘘だと?

静寂が俺達を包み込んだ。多分5分位誰も喋らなかつたと思つ。

時間制限のある中でそれくらいはショックだった。

俺の誰もが力なくうなだれて打ちひしがれている。全員が全員死亡していた。拉致などではなくもつと下。ただの意識の回収だった。それを考えれば10人のうち1人を生きながらえさせることはありがたい事なのかもしない。先に殺し合いをしなければならないが。今は自分が死んでいたというショックで心を占められている。殺し合いをしなければならないことなんかどうでもいい。

異世界トリップか召喚か、超科学による意識のサルベージか。そのどれかでも元の世界に帰るか帰らないかの選択ぐらいはやりたかった。漫画も積んでたし、ラノベはタワーになつてた。ゲームは10万位積んでたかもしれない。今になつて後悔ばかりする。……家族にも、会えないのか。平行世界ではもう俺の葬式は終わつて、部屋も片付けられてはいるのだろうか。もう、『悲しいけど、しょうがないこと』として処理されたのだろうか。泣いて、くれたんだろうな多分。老後の世話できなくてごめん父さん母さん。そこは姉貴だよりになつちまつた。あと、パソコンは武士の情けとして見すに処分してくれればいいんだが。

ぐるぐると他愛無いことを考えては薄っぺらい現実に思考が行き詰まる。死んだんだと俺。しかも本物であり「ピー」もあるんだ。非日常に興奮してたさつきまでが馬鹿みたいだ。白い壁が精神をジリジリと焦がす。そうすると魔法でお墨付きをもらつたこの空間が俺の意識をチクチクと痛めつけてくる。

ため息をつく。

イスのへりに頭を乗せて天井を見上げる。50メートルが一辺の空間は結構天井が高いのだなと思つた。どうでもいい。

……ふと、俺の魔法には意味があつたんだろうかと考えた。普通の味のクラブハウスサンド、ジュークにポテチ。それらの全てに実体がなかつたという事実。それでも食べた感触と自分の心臓の鼓動くらいはわかる。

……実体がない？……意味はある、のか。おそらくだが一つの推論が芽生えてきた。

周りの俺に伝えたくて発言をする。

「……ウノ発言。肉体と精神と魂で人間は構成されてるらしいな。それで思ったんだが別に精神が脳みその中にあって、魂が心臓に宿つてるわけじゃないと思うんだよ。

透明なセロハンに自分が描かれてあってそれが三枚重なつて初めて自分になつてるんじゃないか？」

「……ハジメ発言。つまりは？」

「ウノ発言。そう考えると俺らは“意識体”精神と魂が重なつていて体の一枚だけない状態と考えよう。ちゃんと意味はある。食うことも寝ることも意味があるんだよ多分。実体が無いだけってのはそういう意味だろ？ 意味がなかつたら目の前に食べ物飲み物現れなつて。

我思う故に我あり。つまりまだ俺たち10人はぎりぎりのところで生きてるんだよ。

それに全員が本物でもありコピーでもあるなら全員が本物つてことだ。別に複数人の俺が存在することは矛盾しない

暴論。極端な無理やりに近い理論。それでも俺はまだ思考を続けている。死んでない。言葉だつてまだ喋れた。今になつてもジュークは飲める。食べ物も口にしても味はする。

特別美味しいとは言えなかつたポテチはさらに味気なくなつ

てたが。それでもまだ無意味にはなっていない。
たとえ意識だけになっていてもまだ意味は奪われていない。

「イー発言。つまり俺たちが動いたり考へてもそれは精神上の活動
だつたり心の反応にそのまま置き換わるつてことか。

だから精神衛生上の概念的な食べ物も存在すると。そのまま精神
活動を富ませたり気づかない馬鹿を騙すためにも“意味”だけは奪
われていないので

意識体はきちんと活動することができるはずだ。この部屋の中の
話だが。だが外は分からぬ。荒野なんか砂漠なんか雪山なんか平
原なんか。この空間を作った人間と会つことができるのか。喋つて
る内にだんだんと氣力が戻つてくる。

一度リセットされた思考の中で一つ欲求が生まれていた。

できれば真意を聞いてみたい。

わざわざ死人の意識を10人用意して殺しあわせることに何の意
味があるのか。

別に俺を使って殺しにかかつてきたのにムカツイてるわけじゃない。
俺はそんな事で怒りを感じるタイプでもないし実は死んでると
言われても事実かどうかまだわからない。

ただ純粹に聞いてみたいと、そう思った。俺が思ったということ
は周りの『俺』もそう思ったということだ。

「アイン発言。じゃあ こつから出ますか

全員が頷いた。

イスや会議セット、書類のアレラが出てきた時のように変化は瞬きをしてからだった。

一瞬で現れた人一人分の扉。シックで重厚な深い木目調のそれ。白じやないことにどこか安堵を覚える。

真鍮色のドアノブを掴んでひねり、ドアを押しあける。

会議セットのある空間から別の空間に這い入りでた感覚。扉の先も真っ白い空間だった。明確な違いは分からないが向こうとこちらでは何かが違う。あの空間は精神に負担をかけていたらしくからその分開放感を味わっているのかもしれない。

そして眼の前にいたのは俺だった。ジャケットにTシャツジージーパンとラフな格好をしている。靴もスニーカーだ。足元には革製のカバンが落ちてある。

「よつ

「おつ

お互に挨拶を交わす。漫画や娯楽だとここで大抵神様やら高位次元の存在Xからのネタばらしがあるはずとちょっと期待していたんだが。

ドアを開けたらまた俺。普通に殺し合いでしてきた奴らだつたら奇声をあげて襲い掛かってくるといふなんじやないかと思つ。とりあえず聞いてみる。

「お前は？」

「お前の体だよ“意識体”

動いたり喋つたりしてるのは精神と魂のキャッシュ・シュー部分がちよつと残つてるからだ。

意識体があんまり離れてはいるけどだんだん人として死んでくからな、あの空間の時限設定はそこからきてるらし

「で、俺が呼ばれた理由とか知つてるの？　お前は

「おう知つてる。

脳みそ中に“メモ”があつたからな。

合体？　憑依？　まあ“一人”的俺に戻れば理由がわかる

「思い込みじゃねーだろ? な?」

「違つて。やればわかるつて

「じゃあ、まずお前横になつてよ」

「お前がなれつて」

「お前が器の体だろ。先行けつて」

「2枚重なつてるのはお前だろ、なら先にお前だろ」

『まあいいや。つておい』

2人同時に横になつては意味がない。寝返りするとキスになるので嫌だ。横にズルズルとずれていく。

強力な磁石だつたりあり得ないほどの出力の掃除機か。ぶつかつた腕を基点としてそこに吸い込まれていくのは奇妙な感覚だつた。そうして一瞬で重なつた俺は改めて（一度目は体）事態を把握した。

事態は一言で言い表せばこうなる『あの世界から弾き出された』寝てる間に地震があり、それで俺は死亡。しかし寿命が残された分だけ“矛盾”が発生してあの世界から弾き飛ばされたらしい。そしてそれはめつたにないイレギュラーだそつだ。かなりのレアだとのこと。

で、あの世界に俺らより存在が上の管理者いて。
たまにあるこういう事態に対応するために今回の出来事になつたらしい。

管理者は管理している次元の俺らに直接接觸を取つてはいけないこと。

弾き飛ばされてこれから重力に従つて別の世界に漂着する俺に対する補償として今回の【蟲毒】が開催されたこと。

あの空間は1人になると殺したりいなくなつた奴らの力を取り込む作用があつた。

管理者が直接力を与えたり、祝福を与えることも都合よくできないので1人の体積に10人の存在を詰め込むことで力のブーストを図つたこと。これで俺は常人の10倍の力や成長能力や記憶力を持つになる……らしい。管理者もいろいろと制限があつて【蟲毒】ぐらいでしか今は俺達に“ボーナス”を与えることができなくなつている。

相討ち、同時全滅でも1人に無理やりなるらしい。
事情は大体こんな感じだつた。

あ、体は管理者さんが精魂込めて作つてくれた特製ボディ。すでに10人力。

「しかし管理者とかいたんだあの世界……。やっぱ胡蝶の夢すなあ。
体験するまでわからんね」

体を動かしながら調子を確かめる。

管理者曰く1～10人分までの力の調整なら簡単らしい。いいとこ取りである。1人の体積に10人の出力。精神もある空間を抜ければいいとのことで俺らのことばツチリ把握されている。
単純に横に兵士10人並べるよりももっとすごいらしいけど今はまだ知らん。

ただ尋常じゃない風を切るスピードとか腕振つたりした反動で空中を舞つたりして遊んでた。

存在レベルからして10人の力。概念的にも濃縮してある分アドバンテージがあるらしい。これから行く世界ではほどほどに無双ができるとのこと。

「しかしこれが異世界人補正の裏側か……。

納得できるようなできないような後味の悪さ……。

なんだよ蠍毒しかできないって。いや外部装置として与えるにも一苦労つて頭の中に浮かんでくるけどさ。

あーくそうつせえ！ 分かつたから！ はい交代！

つてヨツシャー！！ すげえすげえなんか10メートル位軽くジヤンプできるー！！

ネタばらしをすると。

あの空間での最後の魔法は『佐々木九曜は10人であり1人である』

ヒントは『・10人全員が本物でありコピーでもある』
意識体で全員本物ならベン図の中に放り込んでしまえばいいという判断。

これで1人で10人分だし1人が10人でもあるという矛盾した状態になった。

おそらく分身もマルチタスクも可能になつた……はず。これが管理者の想定してた最適解だろう。殺し合いになれば最低10人分の強勒さを持つた精神に昇華されるし、最適解を見つければそれプラスマルチタスクだつたり殺しをしなくてすんだり。価値観も違うだろうし、殺し合いを設けたのは個人として最も優れたものが残るべきだと考えていたのかもしれない。もしくは最適解を出せるくらいの頭の回転をあちらが欲しがつてたのかもしれない。全部憶測だけど。

自重して欲しいんだろう多分。

事故にあつて補償を受けたからといってあんまりはしゃぐな、と
いう遠まわしなメッセージがある気がする。

付属している情報では地球の神話みたく肩入れしたりしなかつたりするとひとつ時代を左右するほどになつちゃうから【蟲毒】という訳のわからない距離感になつてしまつたとある。昔は管理者も原始的なことしか出来なかつたらしいが。あの世界の神話がそれの

名残りだとなんとか。管理者と俺の存在や力の比率ではミジンコと人間以上の差があるらしい。ミジンコが俺ね。確かに俺もミジンコに力を与えると言わても困る。皿に水入れてそこにミジンコ入れてわざわざ角砂糖の力口リーを与えるとかは想像もつかんくらい面倒だろしどうやればいいのかわからない。まあ高位次元の存在が何をできるのかとか考えてもしようがないだろう。概念を操つたり、魔法以上のことができるのかもしれないが。管理者は管理者で苦労してるのだろう。

おそらく俺は頭の中に9人の俺がいて、しかしまったく同一の自我を持つという訳のわからない生命体になつていて。多分寿命も10倍、残つてる寿命10倍だから500年か600年くらい生きれるはず。

これから先俺はきっとひとりごとの多い人間として見られるのだろう。

分身をすればまた俺が10人生まれるはずだ。10人力の無双の方が今は楽しいからしないけど。

体を得たから魔力も持つてるはずだ。管理者謹製のボーディだ。きっと常人の10倍の魔力保有量だつたり生成量だつたりするのだろう。単純に思いつく概念的強度やらでも10倍の成長能力とか記憶力とか精神力とか楽しみだ。

俺TUREEEEEE!の雰囲気が気分を高揚させる。死んで異世界トリップするんだ。今は楽しんでいてもバチは当たらないだろう。

魔法が使えるようになつたら脳内チャットにできるように改造してみようかな。さつきまでは区別がほとんどできないからいちいち自己申告をしないといけなかつたんだよな。

しかしこれ犯罪ではすげえアドバンテージだよな。分身できてアリバイも成立する。しかも人外の力を誇る。

あ、はいやり過ぎると来世が大変なことになるんですね。ログが

今から行くあちらの管理者に見られると。メモありがと「うわこます。

俺ほどあなたを信じてる人間も居ないので自重しますよ。ホントですって！

さて10人全員楽しんだところでそろそろだ。

この空間ともお別れだ。メモでは自身の意志で移動が完了するとのこと。持ち出せるものも何も無いはずだ。体の俺の持っていた革でできたカバンの中には水と2、3食分の食料、下着の替え、財布（日本円）が入っていた。

俺の世界移動管理者からすると引越し？に際してあの世界の管理者が用意してくれた餓別だらうか。あちらのもの、俺の所有物しか持ち出せないんだらう。直接作用できないらしいし【佐々木九曜の財産あれこれ用意しろ】とかやつてくれたのかね？

どの世界に移動するか分からぬから頼れるのはさつき手に入れた10人人力ボディと10人の俺。

村の付近にでも出ればそこでバイトでもしてある程度金を稼いだら大都市の好事家に前の世界の通貨を売れば当座はしのげるだらう。まあ漂着したらそつちの管理者にあんま迷惑かけないようにとは“メモ”にある。

あんまり派手な行動を取らなければ問題ないだろ？

最後に心の隅に少しだけ寂しさを覚えた。

もう会えない家族との別れか、あの雑多な日本でのそれなりに快適な生活をリセットしなければいけない無為感だったのかはわからない。

まだここはあちらとこちらの境目だ。それでもこれから本当にあの世界と別れないといけない。

俺は、前に進まなければならない。

「つよしー 行きますか」

気持ちを前に向かせる。異世界トリップなんてそういう体験できるもんじゃない。楽しめるだけ楽しまないと損だろ？

すこし気勢の戻つたさつきまで何度も耳にした声を聞いてから。俺は一步前に踏み出した。

ざわざわと周りの空間が揺れて明滅する。

それは草原だったり火山だったり雪の積もった山だったりした。一部が塗り替えられたように変わってまた別の空間に変わる。映画のワンシーンみたいだ。

まるで行き先を決めるルーレットのよう。そして一瞬だったのか10分だったのか。自分がどこかに吸い寄せられる感覚。それと同時に五感があやふやになっていく。目を閉じてされるがままに受け入れる。

そこまでは良かつたんだが。

……ただ最後に聞こえた声のせいでものすごい不安になつた。

「 ハヤシ — ツツシムツ ... ！」

第一話 自分ほど信用出来ない人間はこの世にいない（後書き）

感想、評価待つてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5284z/>

異世界トリップにおける10人の俺の立ち振る舞い

2011年12月17日22時49分発行